

教育目標: ○自ら学び、よく考える ○進んで協力し、他人を思いやる ○心身ともにたくましく、最後までやりぬく
目指す学校像: ○生徒が主体的に学び活動する学校 ○教職員が協働して教育活動を創造していく学校 ○保護者や地域社会から信頼される学校
目指す児童・生徒像: ○自ら学びよく考える生徒 ○進んで協力し他人を思いやる生徒 ○心身ともにたくましく最後までやりぬく生徒
目指す教師像: ○教育に対する熱意と使命感に富む教師 ○一人一人の良さや可能性を引き出せる教師 ○研修意欲に富み互いを高め合う教師

領域	中期目標	短期目標	具体的方策	努力指標 (中間)	努力指標 (最終)	成果指標 (中間)	成果指標 (最終)	今後の課題	学校関係者評価記入欄
豊かな心と社会性	豊かな人間関係を育むとともに、命の大切さと人の心の痛みが分かる生徒を育成する。	<ul style="list-style-type: none"> 主体的な教育活動を通して自己肯定感を高め、いじめや不登校を防止する。 道徳の時間を「自分なりの答え」を見出す時間とし充実を図る。 社会的能力(「自己表現力」「自己コントロール力」「状況判断力」「問題解決力」「親和的能力」「思いやり」)を高める。 	生徒一人一人のよさを見つけ、認め励まし伸ばす指導。三申いじめ防止基本方針に基づいたいじめ防止と対応を図る。	3 87.5%		4 100%		今後も生徒の良さを見つけ、生徒の自己肯定感を高める指導を行い、いじめの防止に努めていく。また、1学期はクラスで取り組む活動などが少なく、今後も今までのような活動ができないことも予想されるので、それを補う活動も考えていく。そして現在の新型コロナウイルス感染症に関わる、中傷やいじめが起きないように生徒への指導を行っている。	いじめ防止に対する保護者の意見で否定的な意見があることが気になる。保護者が学校の取組を知らないのか、立場が異なると感じ方が異なるということなど要因の分析をしていかなければならない。 ・今後生徒同士のかかわり合いが増えてくると、トラブルの件数も増えてくることが予想される。未然防止のための取組を充実させることを期待している。 ・いじめる子の抱えているストレスの背景を考えていく必要がある。
			「特別の教科 道徳」は、指導方法を工夫し、「考える道徳」議論する道徳を推進する。評価は、生徒の良さを認め意欲につながる評価を行う。	2 75.0%	4 83.8%	昨年度に引き続き、道徳の評価に関する校内研修を行い、生徒の良さを評価し意欲的に生徒が取り組む授業を目指していく。また、学年全体で行う、学年道徳やローテーションでの授業など指導法の工夫も図っていく。また、1学期の臨時休校、分散登校による授業の欠時については、水曜日の6校時の実施、土曜授業の実施により授業時数確保を行っている。	道徳の授業は生徒におよぼす影響がとても大きいと思っている。テーマ、指導方法の工夫等、いろいろと取り組まれていると感じる。 ・道徳の授業で相手の気持ちを思いやる人間性を育むことは、いじめの未然防止に役立つと思われる。 ・実施時間の関係も考えられるが、意欲が低くなっている学年もあるので、今後の対応が必要。		
			教育活動の様々な場面で、それぞれの教員の持ち味を活かし、生徒の社会的能力を高める指導を行う。	3 87.5%	4 84.0%	臨時休校、分散登校中に様々なことを考え、社会と向き合う時間をとれた生徒も多く、その中で社会的能力を高めることができたと自覚している生徒も多い。今後の生活においてもそれを踏まえ、生徒の社会的能力の向上を図っていく。また、それぞれの教員の持ち味を活かした取り組みを継続していく。	生徒はコロナ禍で社会全体が困難な状況にあることを理解している。生徒も自分が社会の一員であることを自覚したことが、社会的能力の向上にプラスになったのかもかもしれない。 ・社会的能力を高めるために、教員一人一人の持ち味を生かして指導を行っているということは大変良いことだと思う。 ・臨時休校、分散登校など指導が行き届かない状況であるにもかかわらず、社会的能力が84%と高まったとする生徒がいることは大変好ましい。 ・臨時休校、分散登校などで通常と異なる授業で発表形式の課題が少なく、自己表現力や思いやりなどがしづらいと思うので今後に期待したい。		
確かな学力	基礎力、思考力、実践力をバランスよく育み生徒一人一人に確かな学力を育成する。	基礎的な知識や技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、学びに向かう力を高める。	授業のユニバーサルデザイン化を図り、分かる授業をすすめる。考えさせる授業、理由を示しながら自分の考えを表現させる授業など、学習活動を工夫する。	4 100%		4 85.4%		授業のユニバーサルデザイン化については今後も推進していく必要がある。また、1学期には、理由を示しながら自分の考えを表現させる授業など発表活動が十分にできない部分があったので、可能な授業の形を検討しながら行っていく。 ICT機器の活用を図り、分かる授業を更にすすめていく必要がある。	授業は楽しくわかりやすいという項目に対して、1年生の生徒の4割が「とても思う」と答えている。また9割以上の生徒が肯定的な回答をしているので安心した。 ・授業日数が少なく、「やらなければならないことをこなす」ことに追われるのではないかと危惧している。 ・授業時数が減れば、満足のいく授業をうけることも困難になる。ただし、分りたいという生徒の意欲がある限り、あとから取り返す、埋め合わせることも可能だと思う。
			朝読書、質問教室、補充教室、サポート教室等を実施し励ましや肯定的な声かけ等、個に応じた指導を充実させる。	3 83.3%	4 85.6%	教員と生徒の評価の差はあるが、今までの取組を今後も継続し、生徒の基礎・基本的な知識や技能の向上を図っていく。また、まなびポケットやライズeライブラリーの活用を図り、それぞれの生徒が個に応じた学習を行えるよう支援していくこともすすめていく。	学習状況の二極化も言われている。習熟度に応じた補習を増やすなど、個別に対応することが望まれる。 ・生徒アンケートを見ると「先生達は私たちとのコミュニケーションを大切にしている」という項目で、肯定的評価をしている生徒が非常に多い。教員が生徒一人一人のよさを見つけようと努力していることがうかがわれる。		
学校居心地感	生徒の学校居心地感を高める。	生徒の心の居場所、生徒同士のきずなづくりの場所のある環境づくりをすすめる。	生徒の実態を把握し困難さに応じて様々な工夫や手立てを講じる。教科の学習、行事、部活等様々な場面で生徒の学校居心地感を高めるアプローチを行う。	4 100%		2 82.8%		学校居心地感の低い生徒に対しては、個別面談等を活用し相談活動を充実させていく。また、今までと同様なことができない現状の中でもノーチャイム生活など三申の新たな伝統をつくることのできた上級生にその素晴らしさを自覚させ、学校に愛着をもたせ、学校の居心地感につなげていく。それぞれの教員の持ち味を活かし居心地感を高める取り組みをさらにすすめる。 教室内の掲示物にも工夫をこらし、良い学びの場となるようにしていき、居心地をよい環境をつくる。	学校での居心地感の良し悪しは、基本的には長い時間を過ごす学級での環境が大きく左右される。学級経営の在り方を見直し、学校にいるのが心豊かに楽しいという心情を大切にしたい。 ・肯定的回答をしている生徒が多いことは素晴らしいと思う。「そう思わない」と答えた生徒にしっかりと寄り添う必要がある。 ・生徒にとっての“社会”である学校での生活は、これから社会に出て生活していくために重要であり、学校で人間関係を築き、居場所を見つけることは大切。 ・学校行事の中止は、大人が考える以上に生徒の人生に影響を与えるかもしれない。3年生に限らないが、楽しい学校生活が送れるような例年とは違った企画を考えてみる必要があるかもしれない。 ・学校での居心地感については(授業の理解度、先生や友だちとの人間関係、部活動での人間関係)が重要である。学校での居心地感を高めるためには、学校だけではなく、家庭や地域で本人の安定した生活や心を支える必要がある。